

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 30 日現在

機関番号：32641

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520185

研究課題名(和文)ゲーテと1810年前後のイタリアの色彩理論との関係

研究課題名(英文)Relationship between Leonardo, Goethe and the color theory in Italy around 1800

研究代表者

Dethlefs H. J. (Dethlefs, H.J.)

中央大学・文学部・教授

研究者番号：60256005

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円、(間接経費) 1,230,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はレオナルド・ダ・ヴィンチの草稿を中心とし、彼が北ドイツ、特にゲーテ時代のドイツにおける芸術理論に及ぼした影響をテーマとした。当初は1810年のゲーテの色彩論の中に、レオナルドの光の理解が受容されかつ変形されているという考えだったが、研究を進める中でレオナルドの草稿に自ら目を通して研究したヴァザーリの重要性が私の目にはっきり見えて来た。以来、ヴァザーリの伝記に散見する色彩理論的発言と並び、これまで一般に蔑ろにされて、2006年ようやくドイツ語に翻訳された「建築、彫刻、および絵画論序論」に焦点を当てた。ヴァザーリは、レオナルドの文献に時折見られる一つ概念を取り上げた最初の著作家である。

研究成果の概要(英文)：In the center of my research project is the investigation of Leonardo da Vinci's remaining manuscripts. My subject focuses on the art-theoretical impulses of Leonardo's color research with regard to the workshop practice in the northern European territories and especially to the art-theory of Goethe's time. Contrary to current criticism it has to be emphasized that Goethe in his color theory of 1810 responded to (and modified) central elements of Leonardo's empirical investigations of light, chiaroscuro and colored shadows.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史

キーワード：レオナルドの図像理論 ゲーテ「色彩論」におけるpiazoso概念 レオナルド、ヴァザーリとpiazza概念 1800年頃のドイツのヴァザーリ受容

1. 研究開始当初の背景

(1) 2005 年以来、研究代表者は、日本、ドイツ、イギリスおよびオランダの学術雑誌や自著において、『色彩論』の中で扱われる Haltung(明暗及び色彩コントラストの関係)という多面的な概念をこの分野において初めて、包括的な形で歴史的・体系的・文化比較的に叙述してきた。これらの成果をもとに本テーマを追うこととした。

(2) 本研究課題においては、Goethe の『色彩論』(Zur Farbenlehre)を初版刊行年である 1810 年前後のイタリアの 4 人の学者 (G.Bossi, L. Cicognara, G. Venturi, P.Petrini) の色彩理論との関連において位置づけることを目的とした。部分的にはこれら学者たちの仕事を知っており評価もしていた Goethe であるが、イタリア人が共通に彼らの理論の拠り所としていた Leonardo de Vinci の色彩論に彼は言及していない。なぜなのか。Goethe とイタリアにおける色彩論の交錯を厳密に辿ることによって Goethe と Leonardo の関係を明らかにすることができれば、従来の研究が見落とししていた Goethe 『色彩論』の極めて重要な側面、特にそれが持つヨーロッパ的広がりという意味が明らかになるであろう。

2. 研究の目的

私の目的は、光の現象(Lichterscheinung)に関わるレオナルド・ダ・ヴィンチの経験的研究を、17、18 世紀の明暗絵画(Helldunkelmalerei)において漸くその表現が開花した新しい光配置(Lichtordnung)についての言語的表現に注目しつつ研究することである。

私の主要な関心は、従来の研究に欠落していた点を補い、レオナルドの経験的研究が視覚と色彩に関するゲーテの研究に及ぼした主要な影響を明らかにすることである。

3. 研究の方法

(1) 光を質的に光源(Luce, Beleuchtung)と光の当たっている物体(Lume, Leuchtlicht)の二つに分けるレオナルドの区別の仕方をまずは時間軸に沿って研究する。

研究上の重点は、レオナルドがどの程度まで 18 世紀の、特にドイツ語圏における、光に関する専門用語に影響を与えたかという問題である。

(2) 光の連続体はレオナルドにおいては光源(Lichtquelle, luce) - 物体に当たる光(Koerperlicht, lume) - 物体自体に見られる影(Koerperschatten, ombra primitiva) - 物体が投げかける影(Schlagschatten, ombra derivative) - 闇(Finsternis)の

5 つからなる。この図式はゲーテにおける明と暗の両極に基礎を置く色彩の進化(Evolution)という捉え方(ゲーテはこれを人間の色彩の知覚の進化と理解した)と比較され得る。

(3) ゲーテにおける、「生理的色彩」(physiologische Farben)という、未来を先取りする重要な理論にとって、中心的意味を持つのは、有色の影(farbige Schatten)である。これに関するゲーテの研究を 1800 年前後におけるイタリアの色彩研究と比較して見ると、両者には一致する点が見られるが、それは共にレオナルドに源を発することを明らかにする。

4. 研究成果

レオナルドの遺稿研究に際しての困難は、遺稿がそもそも非体系的であり、またそれが複数の保所にある保存されているために非常に多様性を持つことにある。

1651 年の Editio princeps 以来、遺稿の体系的叙述を試み、それにある程度成功しているアンソロジーも少なくはない。自然科学の分野に関しては成功とみなしてよいものが複数ある一方、われわれがここで問題にしている視覚および芸術的色彩論研究に関してはそうとは言えないのが実情であった。しかしファクシミリ版の Editio Nazionale dei Manoscritti e dei Disegni di Leonardo da Vinci (Giunti-Verlag, Florenz。中央大学はこれをほぼ完全に所有している)の完成以降、ようやく、レオナルドの光の理解と彼独自の専門用語創造の、時間軸に沿った生成研究をスムーズに行うための前提条件が整った。

3 年に及ぶ研究の間に、私は私の研究計画を一つの点において変更した。レオナルドの草稿に自ら目を通して研究したヴァザーリの重要性がこの間に私の目にはっきりと見えて来たためである。以来、私の研究は、ヴァザーリの伝記に散見する色彩理論的発言と並んで、ヴァザーリの、これまで一般に蔑ろにされて来て、2006 年に至ってようやくドイツ語に翻訳されたところの「建築、彫刻、および絵画論序論」(Einfuehrung in die Kuenste der Architektur, Bildhauerei und Malerei に焦点を当てる。ヴァザーリは、chiaro-scuro 問題に関連してレオナルドの文献に時折見られる一つの問題を取り上げた最初の作家である。これまで知られていなかったこの概念、ないし表現とは、"piazza"、あるいは、ゲーテが「色彩論」の明暗法に関する断章 p.849 ~ 861 中の p.855 に従えば、"il piazzoso" という表現である。

私の研究プロジェクトの中心を占めるのは常にレオナルド・ダ・ヴィンチの草稿であった。そして私のテーマは、レオナルドが北ド

イツ、中でもゲーテ時代のドイツにおける芸術理論に及ぼした影響である。従来の見解とは異なるが、私の出発点は、1810年のゲーテの色彩論の中には、レオナルドの光の理解が受容され、かつ変形されているという考えである。

レオナルドの実際の関心は、光と影の現れ方、および絵画におけるその表現法に集中している。彼の研究の進行の過程には、光の強烈なコントラストのリアルな表現法へのレオナルドの関心が、次第に、陰影の段階的变化によって達成される、照明の正確な表現法への関心へと移ってゆく様子が見られる。陰影の段階的变化という現象は幾何学的方法では叙述し得ないにも関わらず、レオナルドは、光の表現法をも遠近法理論のモデルに従って理論的に捉えようとした。「空気と色彩のパースペクティブ」(Luft- und Farbenperspektive) という名称のもとに、この問題領域は芸術実践上の教授目的となる。遠近の現象を中心投影として幾何学的に捉えてこれを線的に表現し、造形芸術においては線的遠近法を空間的な状況の表現法として捉えて来た視覚に関する学問の歴史は、これによって、決定的に幅を広げられることとなる。空の箱、または空の舞台空間として理解されて来た幾何学的・線的構築の代わりに、明暗の両極の間にある人物や物体の像によって媒介される新しい空間のイメージが登場する。レオナルドの発見は、画家は、様々な位置にある人物や物体に段階的の明るさを与えることで空間的奥行きを表現できるということである。前景は濃い色で強調され、背景は段階的に次第に明るい色で表現される(明・暗コントラスト)。空間的に奥に行くに従って高い明るさで表現されなくてはならないのは、霧、もしくは空気の色のためであり、それが、物体が次第に遠い距離にあることを告げるのである。群像の中のある人物を際立たせたい場合には、その人物を背景よりは明るく描かなくてはならない。

段階的コントラストと明暗の遠近法によって、明るさの配分法が絵画的表現の新しい媒体になる。この明るさの配分法と密接に結びついているのが色彩の扱いである。色彩はそれぞれが持つ明るさの大小によって分類される。明暗による視覚的現実体験は、ダイナミックで生成的な絵画手法となり、それは人物や物体を前景に押し出したり、背景に押しやったりするのである。

私の研究の主眼は、この新しい光の描法がどのように芸術理論的用語法に定着して行ったかを辿ることにある。そこで、「明と暗はいつまでそれぞれ独自の、従って対立する実体と見なされたか、そして何時、絵画全体における関連性が問題なのだという洞察が用語法的にも支配的になったか」という問いを立てることとする。

私の研究結果は、専門用語の歴史における驚くべき非同時代性である。レオナルドは、

chiaro e scuro と、二語を分ける形で、明暗法を表現した。1672年になって初めて、G. P. Bellori が Annibale Carracchi の伝記の中で、対立語を一つにした造語 “chiaroscuro” を用いる。ドイツ語においてそれに相当する専門用語 Hell dunkel が用いられるのは、ずっと後であり、C. L. v. Hagedorn 著の、Betrachtungen ueber die Malerei (1762年) が最初である。しかしすでに 17 世紀の後半において、オランダでの使用に続いてそれと意味的に競合する一語がドイツでも市民権を得る。“Haltung” がそれである。Haltung は、オランダ語の “houdling” の借用語であり、その最初の理論家 W. Goeree はこれを「明と暗の遠近法」(Perspektive der Lichts und Dunkels) と説明する。この表現がドイツで初めて受容されたのは、1675年、J. v. Sandart の Teuschen Academie においてである。ゲーテは彼の色彩論、pp. 867-79 および p. 901 において、Haltung (明暗の釣り合い) を Hell dunkel (明暗) から概念的に区別して、これを絵画の最終的目的と見なした。

私の研究のさらなるテーマは、(17 世紀の絵画において始まる) 新しい光配置との関連において登場する、有色の影という現象である。その発見者はゲーテということになっているが、これは正しくない。この視覚的現象はすでにレオナルドにおいて議論されており、レオナルドに続いてゲーテとは無関係にイタリアにおいて独自の理論的伝統を形作った。レオナルドに続いてジャンパティスタ・ヴェントゥリが 1801 年に、またピエトロ・ペトリーニが 1805 年に、colori imaginari (ゲーテの用語では「生理的色彩」に相当する) を研究していることを私は証明できる。

私の研究の進行に伴い、色彩配置のテーマは拡大を見た。ヴァザーリの持つ意味が私の問い設定にとって次第に重要になって前景に出て来たのである。レオナルドの影響に関しても、また 18 世紀のドイツ語圏におけるヴァザーリの伝記記述の受容に関してもその事は言える。「ドイツにおけるヴァザーリ」というテーマに関してはこれまで 2 つの研究 (Isermeyer, Kemper) があるのみで、本質的な問題はこれまで主題として扱われては来なかった。このことは用語に関する基礎研究に関しても当てはまる。すなわち、ヴァザーリにおける美学的基本概念はどのようにドイツ語に移され、翻訳の過程においてどのような意味論的変位が起こったかは問われて来なかったのである。ヴァザーリのドイツ語訳は多面的歴史家で、1763 年から 1764 年までニュルンベルクで発行された週刊誌 “Der Zufriedene” の編者である Christoph Gottlieb von Murr によるものが最初である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

[1] Joachim Dethlefs, Vasari-Studien I: Michelangelos Wasserbecken:

Bildhauerische Methode oder metaphorische Ekphrasis, 2014年、中央大学文学部紀要言語・文学・文化編、査読無し、114巻、pp.51-70

[2] Joachim Dethlefs, Vasari-Studien II: Vasari und seine deutschen Kritiker:

Zur Rezeption der Michelangelo-Vita um 1800 2014年、中央大学文学部紀要言語・文学・文化編、査読無し、114巻、pp.71-82

[3] Joachim Dethlefs, The Capriccio Dispute - Positions in an Aesthetic Debate at the Time of Vasari, 2014年、Journal of the Courtauld and Warburg Institutes, 査読無し、pp.143-155

[4] Joachim Dethlefs, Ground or Background? On Leonardo de Vinci's concept of campo, 2014年、Simiolus、査読無し、印刷中

[5] Joachim Dethlefs, Was ist Haltung? Ein Kommentar zu, 2014年、査読無し、pp.867-70; 872; 901 von Goethes Farbenlehre

[6] Joachim Dethlefs, Transmission und Rezeption im Goldenen Eeuw - Über Leonardo, houding und Haltung in einer Quelle des 17. Jahrhunderts aus Schweden (Manuskript abgeschlossen) 査読無し

〔学会発表〕(計3件)

[1] 2014年9月27日, Herbstakademie des Philosophischen Instituts der FU Berlin & Exzellenzcluster Languages of Emotion: Was ist Haltung?

Vortrag Hans Joachim Dethlefs: Das , spatiiierende ' Auge - Das bildtheoretische Konzept der Haltung in vier Einstellungen

[2] 2014年3月20日, Tagung: ArtLex (M.C. Heck), Forum Kunstgeschichte Paris; Vortrag: Hans Joachim Dethlefs, Zum , topographical turn ' in der Kunstlexikographie;

[3] 2013年12月14~16日, Symposium: The rise of the art terminology in northern Europe 1600-1750;

Vorträge: Michele-Caroline Heck, Université Montpellier (F), An ECR-Grant:

LexArt - the rise of the northern art terminology;

Hans Joachim Dethlefs, Konstellation Nürnberg: das Entstehen der deutschen Kunstterminologie 1500-1550

6. 研究組織

(1) 研究代表者

Dethlefs H. J (デトリス H. J.)

中央大学・文学部・教授

研究者番号: 60256005